

アマダイ通信NO. 84

(Tile fish network letter)

2012年 新緑目に優しく

知人・友人各位

震災で多くの人命が失われ、家どころか肉親をさらわれ、命からがら逃げ延びた多くの被災者と、原発から避難された方々の、辛く苦しい生活が続く傍ら、時が過ぎれば花が咲き、新緑が芽生えるように、東京では表向き日常の生活に戻ります。全ての受難者に深い哀悼と連帯の意を表すると共に、全世界から寄せられた暖かい支援に深く感謝します。

◎「千年に一度」の震災に思う

地震と大津波の大震災から一ヶ月余、多くの人命が失われ、原発の危険は去らない。伊勢湾台風のように、かつて多くの日本人の命と財産を奪った台風は今や予測可能となり、その被害は微々たるものとなった。しかし今回の地震では液状化現象と交通機関への被害を除けば、建物の倒壊等もほとんどなく地震そのものの被害は少なかった、というより、大津波の威力の前には霞んで見えただけなのかも知れない。それは想像をはるかに越えるものであった。そのために原発すら制御出来なくなり、解決の目処さえ立たない。

人間は棲み家と生業の場を求め、大津波が来ればひとたまりもない所に集まり棲み、快適さと効率性を求め、とめどなく欲望を膨らませた結果、再生産可能な草木や水だけでは必要なエネルギーを満たすことが出来ず、石炭と石油という化石資源を見出し、更に自力では最終的にコントロール不可能な、未完の、禁断の技術にさえ手を出し、未曾有のリスクを発生させた。これは地球上に人間が増え過ぎたことと、膨張し続ける欲望への警鐘かも知れない。安全に住める場所で、再生可能なエネルギーの範囲で暮らささいと。

しかし、地球上に今一つしか存在しなくなった資本主義という生産様式は、雪原を駆け落ちる雪玉のように絶えざる膨張を必要とし、限界に突き当たっては戦争で解決して来た。二度の世界戦争が原子爆弾を生み、原爆が人類の生存を不可能にすることが明らかになることで、辛うじて世界戦争が防がれるというパラドックス。結果、市場、空間としてのフロンティアの暴力的な拡張が不可能になるのみならず、今回の津波による原発の破壊は、その原動力となるエネルギーを無限にもたらすフロンティアも、最早眼前にないことを意味しないか？地球上にフロンティアは既になく、43億年とも46億年先とも言われる、地球が存在しなくなる日までに、人類は他の宇宙にニューフロンティアを発見して移り住むことが出来るのか？そのためには如何なる生産様式、人間の生き方が必要なのか？

そんなことを思いながら、4月10日の日曜日、爽やかな春の風が吹き抜けるホームコースの小川カントリーで、桜を愛でながら、仲間12人でゴルフを楽しむ。前夜は三鷹寮の新入生歓迎会。ホールでの一次会、棟毎のラウンジでの二次会を若い諸君と楽しむ。更に和食レストラン華屋与兵衛に百人近い若者と繰り出し、2年後輩の勝部君と二人で交歓する。自粛することが縮小再生産につながり、災厄の影響を更に悪化させ、復興の財源も覚束なくなるということに気がついた人が増えたか、小川CCの駐車場は満杯に近かった。新入生歓迎会も、中国をはじめ沢山の国からの多くの留学生を含め、新入生で一杯だった。早く日常に戻り、それぞれの持ち場で頑張っていて、被災者と連帯したいものです。

◎自肅を自肅、ガーラ湯沢へ7回目のスキー

震災当日、地下鉄に乗るのを諦め、6時過ぎに事務所を出て、東京駅丸ノ内北口行きの超満員の都バスを追いかけ、次の停留所で降車口から乗る。小走りで追い付けるバスではいつ着くか心配だったが、東京駅で晴海行きに乗り換え、8時過ぎ勝どき着。我が家に帰るとエレベーターは不通で、13階まで歩いて上がる。被害は食器棚の薄いワイングラスが一個割れただけで済む。途中のスーパー2軒で食物を調達しようと思ったが、おにぎりや弁当、惣菜は売り切れ。家に帰ると不通だったガスは通じていて調理、床暖、風呂は大丈夫。余震におびえながらも、冷蔵庫からビールを取り出し、遅い夕食。9時半には止まっていたマンションのエレベーター2ヶ所、5基のうち1か所、3基が動いたと館内放送。

保育園に通う孫娘は妻が迎えに行く。翌土曜日は越後湯沢でヨチヨチ歩きの孫娘の雪原デビューの予定だったが、客で溢れる地下鉄の駅に入らず、六本木から3時間歩いて明け方我が家に辿り着いた娘は、その気力はないと宿もキャンセルする。地殻パワーの余りの凄さに何となく萎縮する、歌舞音曲、行楽を敬遠、自肅するのもわかるが、スキー場やゴルフ場、ホテル、レストランなど、サービス業の経済的二次被害者が出て消費が冷えれば、経済は縮小再生産に陥り、税収も上がらず、復興の財源も覚束ない。

お台場に原発を作って、半径10キロ、20キロは避難だということになると、地震当日の帰宅難民どころじゃない。絶対安全だと言いながら、火力発電所と違って、東京や大阪ではなく過疎地に原発をつくるのは、やはり安全性に自信が持てないということか。原発は心配だが、自分に何か出来る訳でもない。孫と一緒にスキーは流れたが、ホームグレンデの宝台樹日帰りスキーで、地震の巨大パワーに負けない気力、体力を函養、これまでのお世話に感謝、スキー場を激励に行こうと仲間と意思一致するが、余震も多発、こんな時のスキーは大人気ないと友人は翻意。無理に説得して万一悪い結果が出てはという「大人の判断」も働き、日曜日、95センチの短いスキーを担ぎ、運転を再開した上越新幹線で一人湯沢へ。下山コースを新設した駅直結のガーラ湯沢でショートスキーを楽しむ。

◎それぞれの持ち場で最善を尽くす

3月15日に予定していた大阪での三鷹クラブの講演会は、大阪の医療法人理事長の講師が、仙台の大学の理事長も兼務、急遽仙台急行ということで中止に。講演会の夜は大阪泊まりで、当日名古屋で二件、翌日大阪で一件営業予定を入れるが、宿泊は止め、連続の日帰り出張に。名古屋から東京に帰ると、新幹線のホームは若い母親と子供でごった返している。原発ショックで大量避難が始まったのか？親の実家の京都へ行くという茨城の子や東京からの脱出組も。私立学校の春休みとも重なり、親の田舎に取り敢えず帰省しようという客で緑の窓口も長蛇の列。慌てて自動券売機に並び翌日の大阪出張の乗車券を買うが、翌朝の新幹線はそれほどの混雑でもなく、拍子抜け。

関東にも大地震が来るとか、今回の震災で食料生産が滞るとかの風評が広がり、一時食料の買い占めも起きた。近くのスーパーのマルエツや文化堂では、牛乳も米も、水も納豆も買えないと妻。需要不足、供給過多の時代だ、被災した工場の分は生産が減るにしても、食料も慌てなければ行き渡る筈。オイルショックの時トイレットペーパーを買いだめした者は、後で処理に困っただろうと思いつつも、自分でも不足している物を探してしまう。こんな時は普段見えないものも見え、色々考えさせられる。冷静に行動したいものだ。

原発ではもたついているが、震災避難や災害救助でも、他国だったらこれだけ秩序立って出来るか？原発は上手く止められず最悪のレベル7との認定だが、放射線の量はチェルノブリの十分の一だ。木造家屋を主に、津波で沢山の建物が破壊されたが、地震で倒れたビルは、東京でも東北でも殆どない。あれだけ過密なダイヤで走っていた新幹線だって一両も脱線せずに緊急停止、怪我人一人出なかった。翌々日には上越新幹線でスキーに行けたし、翌週は普通に名古屋、大阪に出張し仕事できた。政権を批判しても職を失ったり、投獄されたり、殺される訳でもない。衆議の上、衆智を集め、力を合わせ復興する。被災者に想いを馳せながら、それぞれの持ち場で最善を尽くすのが何よりだ。それぞれの持ち場で頑張り、生産性を高めれば復興財源も生まれ、社会に貢献出来る。

◎放射線と健康被害、医療被曝

4月7日の朝日新聞朝刊科学面、日米共同運営の「放射線影響研究所」による被爆者9万4千人とそうでない2万7千人を60年間追跡調査した結果が載る。一度に200ミリシーベルト以上浴びた場合だけ、がんの発症率が10%上がり、そのレベルでも白血病、胎児、遺伝に影響はみられないという。100ミリシーベルト浴びた場合はがんの発症率は5%上がる計算だが、追跡調査では判別出来ず、喫煙の有無による差の方が大きいという。

4月3日の日経朝刊の特集記事でも200ミリシーベルトを全身に一度に浴びても臨床症状は確認されず、500ミリシーベルトで血中リンパ球が減少し、1千ミリシーベルトで悪心・嘔吐が起き、3千から5千ミリシーベルトで50%の人が死亡、7千から1万ミリシーベルトで致死ということだ。因みに胃のX線集団健診一回で0.6ミリシーベルト、胸部X線コンピューター断層撮影(CT)1回で6.9ミリシーベルト、がん放射線治療(局所)で1千ミリシーベルト。ステージⅢb(ほとんど治癒する見込みなし)の大腸がんで肝臓と肺への転移のおそれがあるからか、完治といわれる術後5年を過ぎ、8年経過したのに年に一回、腹部と胸部のCTを撮る。これだけで毎年13.8ミリシーベルトの放射線を浴びている計算だが、通常浴びる放射線量(一年間の累積。以下同じ)100ミリシーベルト以下では健康被害はなく、世界平均の一人当たり自然放射線量は2.4ミリシーベルト、日本人のそれは1.5ミリシーベルトだ。放射線作業者の限度は年間累積20ミリシーベルト(5年間平均)、緊急時の作業者の上限が年間累積250ミリシーベルトだ。

福島原発で世界中の人を心配させているのは申し訳ないが、冷戦時代、米、ソ、英、仏、中の核保有国が競って核実験をしていた時代に、彼らがばらまいた放射線の危険性に比べればはるかに低い。東京の人間が痛痒とも感じないのに、それらの核大国が根拠なく国民を退避させるのは身勝手ではないか？核保有国は即時に全ての核兵器を廃棄すべきだし、日本は世界に正確な情報を発信すべきだ。4月26日、三鷹クラブは放影研元理事長の長瀧長崎大名誉教授(S28年入寮)に緊急に、「放射線と健康被害」の題で講演をして頂く。

◎耐震・省エネ・エコミナーな街造りへ！

幸い今回の地震で、81年に強化された耐震基準で造られた建物は殆ど損傷しなかった。問題は水、電気、ガス、下水、通信等のインフラだ。津波でやられた所に同じ形で住むべきではなく、高台にエコで災害に強い、自立した最低限のライフラインを持つコンパクトな街を作り、そこから海や田畑へ働きに出かけるようにすべきだ。港に残さざるを得ない

最低限の施設は津波に強い高い建物にして、緊急の避難所を兼ねる。工場やガソリンスタンドも高台に作る。病院や行政庁舎、学校は井水を利用し水道を二重化、太陽光や風力、夜間電力、自家発電と蓄電池を組合せ災害時の最低限の生活基盤を作っておく。通信は拠点をマイクロウェーブや衛星通信でも結ぶ。下水は高台の街では下水処理場を高い所につくり、処理水を海に流し、市街地以外では戸別に合併処理すればいい。

千年に一回の震災ということは、この先千年はこの規模の大地震は来ないのだから、首都機能を東北に移し、東京の過密を緩和、震災に強い街に造り直すことで、東京直下型地震に備えるべきではないか？高度成長時代に大量の地下水を汲み上げ、地盤沈下の元凶となった工場が地方や海外に移転した後も、地下水利用規制が続く東京では地下水位が上昇、東京駅や上野駅が持ち上がり、何回も地下にアンカーを打って浮上を押さえている。地下水利用規制を緩和、病院や大学、小中高校、ホテル、役所、駅ビル、デパートやスーパー等、人の集まる公共空間には井水利用の専用水道システムを導入し、水道インフラを二重化、自家発電や非常用電源を備えれば、断水は避けられる。

●が水先案内人を務める電源開発が、目白の椿山荘や新宿の京王プラザホテルの古井戸を改修、膜濾過式の浄水設備を設置、水道のインフラを二重にした上で、高度処理した水を安く提供している。東大病院や東大医科学研究所、東京医科歯科大学病院でも同じシステムを導入しているが、都の金町浄水場の水道水の放射能汚染でパニックになったので、東大病院で調べたところ、放射線量はペット入りのミネラルウォーターと変わらないとのことだった。長年月かけて 100 から 150 メートルの地下水層にたどり着くまでに、雨水の汚れや放射能は地層で漉し取られ、減衰するのだ。

原発事故で電力不足を解消するのに使用抑制が避けられないとして、長期的には火力発電と自然エネルギーで穴埋めする必要がある。幸い故郷能代には東北電力の火力発電所があり、原子力にシフトするとして中止になった 3 号機の用地は直ぐにでも着工可能だ。北風の強い故郷の長い海岸線は風力発電と潮力、波力発電の適地だ。故郷振興と電力不足緩和の一石二鳥を計れないものか！

◎痴漢呼ばわりされ、久しぶり警察の取り調べ室へ

震災の翌週、大阪とんぼ返りで出張、顧問先と客先を新橋の木曾路で引き合わせ、しゃぶしゃぶで一杯やる。汐留まで夜風に吹かれ、都営地下鉄大江戸線に乗る。勝どき駅上の超高層マンション一階、スーパーデリドへ。連れ合いに水は重いから買って来てと言われ、前の晩ようやくお茶を 6 本買ったのに、娘のマンションで孫娘のホッペにチューした代償に！？おいて来た。今晚は我が家のためにと売り場で商品を確認、手を伸ばすと、細身で色白の神経質そうなオバサンが、あんた娘に触ったでしょう！と買物籠を捉まえる。後のまだにきびが残る荒れ肌の娘が、私のお尻に触ったわよ！警察に行きましょう！と凄じい剣幕。馬鹿な言いがかりは止めなさい！と一喝するも、店長呼んで！と大騒ぎに。

店頭で騒がれてもと思ったか、店長に小部屋に押し込まれ、三人で押し問答。お尻に手で触ったでしょう！と娘。痩せたお尻になんか興味ないよ！と言ったら、火に油を注ぐと思っていると、とにかく悪かったと謝りなさいよ！店出入り禁止よ！とヒステリーママ。おいおい、その場しのぎで謝ったりしたら、次はあんた認めたでしょう！となって痴漢にされちゃうんだ！と納得。その手に乗るものか、と思っているとお巡りが 5、6 人現れ、

とにかく署へと、パトカーの後部座席でサンドイッチに。学生運動以来 40 年振りに警察の取調室へ。運転免許証は見せ、調書の記入は拒否、四方山話をしている間に、母子が謝りたいと言っているとお巡り。ビデオを回したら、●のカバンが当たっただけらしい。

足利事件など、再審で死刑判決が覆った多くの冤罪事件では、密室の取調での利益誘導や、脅迫、詐欺的手段を用いた自白の証拠能力が否定されている。障害者団体向け割引郵便制度悪用事件では虚偽有印公文書作成・行使罪に問われた厚生労働省元局長の関与を認めた厚労省関係者の供述が相次いで翻され、元局長は無罪となった。しかし、逮捕、勾留され、休職処分となった被告人の不利益は計り知れない。まして、死刑判決を宣告された場合は筆舌に尽くせない。捜査に弁護人を立ち合わせる、捜査過程を録音したり撮影したりして、公正さを担保するなど、「捜査の可視可」が必要だ。

◎チベット紀行(下)

⑤賽銭を箒で掃いて塵取りへ

ポタラ宮に登る。午前中はセーラ寺へ。1 元以上の札は毛沢東の肖像入りだが、ここのお賽銭は毛沢東の肖像がない 1 角や 5 角の札が多い。貧しさの現れか？ 支配する中国共産党への反発か？ 見学中にアラ 50 のおしゃれなオバサンが高山病で脱落。昼食の時に、バツイチで若い恋人と成田でハグしていて、腰の手の回し方からして、妊娠してるんじゃないかとか、皆勝手なことを言っている。●は遅刻して目撃していないので残念だが、恋が出来るというのは素敵だ。愛があるなら年の差なんて！

昼は二手に分かれて食事するが、隣のテーブルを見ると地ビールをやっている。慌てて頼むが 3. 8 度と薄く、サイダーのよう。缶ビール一本 10 元と安いのが、二本は飲めず。ポタラ宮の宮殿入口から中の白宮入口まで 240 段、30 分の登りは確かにきついが、添乗員、ガイドから散々言われていたようにアルコール抜きでなければ無理というのは、今回の 18 名には当てはまらず。もう少し年輩のご婦人もポタラ宮でダウンするが退くに退けず、助けられて登り通す。ダウンのご婦人 2 人は酒は飲まない。空気圧が低い高地で、空気をどれだけ肺に取り込み、取り込んだ酸素をどれだけ血中のヘモグロビンと結合、体の隅々にまで供給できるか？ の問題だから、高山病は体調や肺活量の問題ではないか？

農奴制度の下での祭政一致で積み上げた富のオンパレードで、黄金と宝玉で出来た幾世代ものダライラマやパンチェンラマの棺やキンキラ金の宮殿、仏像は見応えはあったが、あの宝物が国民の生活のために、国の近代化のために何故使われなかったのか？ との思いが湧き、同行者からも同じ声。これだけの富を一身に集め、国民の生活が貧しいままなら、中国共産党による「解放」も仕方なかったとの声も。現地ガイドによれば解放時のチベット人の平均寿命は 38 才で現在は 67 才。輪廻転生を説き、来世の転生のために現世で善行を積み、仏に祈れと説き、死後も魂は不滅で生まれ変わり、脱け殻の肉体は切り刻んで鳥に食わせる鳥葬を行う高僧が、何故自らの肉体をミイラとして残し、崇拜の対象とするのか？ チベット仏教徒は何であんなにお祈りに時間を費やすのだ、その時間をもっと勤労に使えば、現世でもっと幸せになれるという、経営者らしい厳しいお婆さんも。物質生活と精神生活の問題は難しく、キューバツアーで「貧困は人類の敵だ！」という確信に多少疑問を持ち始めた●だが、若い坊さんが賽銭を箒で掃いて、大きなブリキの塵取りで集めているのには違和感を覚える。

⑥ラサの平均的農家？

ラサから遠出、4950m の雪のカムパ峠を越え、最深 90m、琵琶湖より少し小さなトルコ石という名を持つきれいな淡水湖ヤムドク湖の畔で、「ファーストフード」の弁当を食べる。鱗のない魚が採れるというので鰻かと思ったが、鱒のように斑点がある。鯉の仲間だというが、鱒のようだ。三枚におろされ、紐に繋がれ風に吹かれている。

帰路チベット族の遊牧民の民家に寄る。三世代同居の大家族。土塀に囲まれ、立派な屋根付きの門の前で、深い皺を刻んだ赤銅色の顔に優しい笑みを浮かべ、赤ん坊を抱いたお婆さんが、鼻を垂れた孫娘と一緒に迎えてくれる。早速携帯で一枚撮り、フジフィルムの Pivi に赤外線通信で送り、プリントアウトする。一階には大きなダイニングキッチン、窓から壁にかけ L 字型の高い腰掛けが巡るが、オンドルではない。奥にはブラウン管テレビ。応接間でヤクの乳のバターを入れたバター茶と、炒った裸麦の粉をバター茶と混ぜあわせて団子にしながら食べる、主食のツァンパを頂く。多少匂いがあり、女性陣の分三杯も余分に味わうことに。ツァンパは余り味がない。

平均的な農家というが、ダイニングと応接間の間にカウンターのある部屋があり、人気はないが雑貨屋も営むようだ。二階には仏間の他に三寝室あり、中庭で家畜を飼い、ライトバンが一台。水道栓が一つ。これで水を賄う。一段高い所にトイレ、大小二つの四角い穴が開き、お尻が風に吹かれる。黄土高原緑化 NPO「緑の地球ネットワーク」のフィールドの、山西省大同市の平屋の二間の農家に比べ立派だ。ガイドはラサの平均的農家だというが、解放後いかに生活が改善されたか？見せるための、ショールームのようだ。

⑦実弾込めた自動小銃のほこ先

山から市内へとんぼ返り、チベット仏教を信仰する者なら一生に一度は訪れたいと願う憧れの総本山ジョカン（大昭）寺へ。中庭に入るとブルーシートのかかった三階屋上で帽子を冠り、マスクした若者が歌を唄いながら、持っている棒をドスンドスンと突き立てている。若い坊さんの武闘訓練と思ったのだが、屋上の三和土の突き固めとのこと。ご本尊の観音様を祭るお堂は、観光客と巡礼者でごった返し、身動きが取れない大盛況！

外に出ると陶製の大きな香炉二つから白煙が立ち込め、巡礼者が五体投地のお祈りを続ける。ポタラ宮の前でもそうだが、50メートルくらいの間隔で大きなパラソルの下に四人一組の兵士が実弾を込めた自動小銃を持ち、背中合わせで立つ。市街のど真ん中で銃口は誰に向けられるのか？巡礼者とラサ市民で一日中賑わい、時計周り（コルラ）で歩くのが暗黙のルールの八廓街（バルコル）。ジョカン寺を八角形に取り囲むように露店が沢山あり、冷やかしながらお土産屋に向かう。2、3人の坊さんと数人の市民？私服警察官？と警察官がやり合っている現場も目撃する。

西寧の土産物屋と違い、いい品物を置いている。去年の暴動の時は三階がレストランになっているこの土産物屋が一番被害がひどかった。漢族が経営し、日本語を話す売り子も漢族で、成都や上海からの出稼ぎだという。店の前にもパラソルが置かれ、自動小銃を持った兵士が四方に目を光らせる。半分の者はお寺を囲む残り半周を冷やかに出掛け、ミニ車や掛軸を買って帰る。再集合してお土産屋の三階のチベットレストランへ。

民族舞踊を鑑賞しながら電磁調理器に乗った鍋を囲む。薄い塩味の野菜たっぷりの寄せ鍋でヤクの肉、ソーセージ、練り物、椎茸、小松菜、空芯菜、レタス、ビーフンが入るが、

大好きな白滝はない。🍷はもう少しつまみが欲しかったし、白飯を玉子雑炊にしてもっと飲みたかった。サービスの飲み物がつくが、テーブルで一人だけビールを頼む。隣のテーブルからも地ビールの金黄河が一本回って来る。道中大麦や小麦から作る地酒のどぶろくチャンは味わう機会がなかった。アルコール度数も 5%と低く、各家庭で味が違い、白く濁っているが、さっぱりとして口当たりがいいという。今回高山病とアルコールは直接因果関係はないということ、九寨溝、クスコ、チチカカ湖に続きあらためて身を以て証明したので、次の機会には是非味わってみたい。

⑧先進か途上か？解放か？侵略か？

1959年の中国によるチベット併合から半世紀も経つのに、中国政府がラサ中心部で実装済みの自動小銃を市民に向けるのはなぜか？ 厳重な警備は支配の正当性不在の証ではないか？ 「チベット・歴史と文化」(チレチュジャ、東方書店、1999年刊)はチベットの「チャムド(東部)地区の鉱物資源は極めて豊富。金、銀、銅、鉄、錫、鉛、石炭、石油、石膏などが確認されている。各種の資源はこれからの中国の現代化のために大きく貢献する」と記すのはほんの一例で、「中国のため」ではあっても「チベットのため」ではないからか？ 鉱物資源だけではない。チベットは中国が喉から手が出るほど欲しい水資源も豊富。地熱、太陽光等の自然エネルギー源、観光資源等も豊富だ。

チベット滞在最終日は歴代ダライラマが夏を過ごした離宮、世界遺産のノル布林カを見学する。ヤムドク湖のレストランや遊牧民家の庭で見かけた太陽熱調理器が庭の隅にある。よく磨かれ湾曲したステンレス製の二枚の翼を太陽に向けて広げ、焦点に弧を描いた鍋置に鍋を据えて料理する。太陽に近く、人々の顔まで赤銅色に焼いてしまう厳しい太陽光線を熱利用する、エコ調理器。鯉が群れ、鴨が泳ぐ広い池のある、9月半ば過ぎというのに、大ぶりの紫陽花などの花が爛漫と咲く広大な庭園に囲まれ、ポタラ宮とは違って低層の落ち着いた佇まいだ。居室には白い陶器のバスタブとシャワー、水洗便器が置かれたバスルームの異空間。イギリスの侵略戦争を辛うじて退けた後、イギリスから贈られたという。

北京空港のTOTOのロゴのついた新ターミナルの最新式トイレ。真ん中に丸い溝のある長いコンクリート塊を腰高の板で幾つかに区切り、最後の区画にだけ排出口があり、時々ジャーっと水で流す「巨大水洗トイレ」。落込み用の穴が空いただけで、お隣さんと顔を見合わせイヤードウモ！と目を合わせて挨拶できる、観光地の「開放落込み」トイレまで色々なトイレを体験。ガイドに勧められ北京のホテルのトイレトペーパーにも、ロールごとチベットまで旅して貰い、武富士のポケットティッシュにも随分助けられた。それでも日本では毎日ウォシュレットのお清めを受け柔な🍷の尻は、「武富士」を鮮血に染めた。変化する中国のトイレの様は、時に経済大国として国際舞台で国力に相応しい権利を主張するかと思えば、まだ発展途上国だと義務を逃れんとする、中国の別の姿かも知れない。

昼食後ラサ空港から四川省都成都經由北京へ。飛行機の右手、雲の向うにかすかに見えるヒマラヤの山並みが消えると、眼下の雲の切れ間からチベットと四川を隔てる雪を頂いた高山が続く。仏像のように白い冠を被り、美しく神々しい峰と峰の間に、エメラルド色の氷河湖が仏像に埋め込まれた神秘の宝玉のように連なり、チベットの旅は終わりを告げる。さようなら麗わしのチベット、絶景に空から別れを告げる。(完)

◎世界の生物多様性保全の現場を見る～企業経営者の考えたこと

・・・東大三鷹クラブ第96回定例懇談会のご案内

大久保 尚武さん(積水化学工業会長、昭和 33 年入寮)に初めてお目にかかったのは 2002 年で、会長に就任されたばかりの経団連自然保護協議会の機関誌に収録する対談。私が「三鷹寮の後輩です」と話したら、「三鷹寮に籍はありましたが、ずっとボート部の合宿所にいました」とのこと。大久保さんの入寮は 1958 年で、私のそれは 1966 年。講師の紹介は同室か同期の友人がするのがふつうなのに、大久保さんを知る人がみつからないために、私のところに回ってきました。ボートの実力はたいへんなもので、ローマオリンピック(1960 年)の日本代表でした。いまは(社)日本ボート協会の会長でもあります。

その対談が縁で、同じ年の 9 月、経団連自然保護協議会のミッションを率いて、中国山西省大同市の私たち、NPO 法人「緑の地球ネットワーク」の緑化プロジェクトにきてもらいました。北京発の高速道路は途中で消え、石炭トレーラーの大渋滞に巻き込まれて 10 時間近くかかりました。車窓の風景を熱心にみておられたんですね。北京からちょっと内陸にはいるだけで、風景が変わります。山はまる裸、河川に水はなく、茶色一色の凹凸がつづきます。「百分は一見に如かずとは、このことですね」としみじみ。いくつかの現場を巡り、記念植樹をしてもらい、日本の NGO が現地の厳しい環境に溶け込んで奮闘していることを高く評価してもらいました。20 年目の今日まで私たちの活動がつづいたのは、大久保さんが社長(現在は会長)を務める積水化学工業の支援があったればこそ。その後も大久保さんは、日本経団連自然保護基金が応援する NGO の活動現場を毎年回っておられます。この基金が一貫して重視するのは生物多様性で、2010 年の生物多様性条約締約国会議にあたって、大久保さんは大活躍されました。

企業経営においてもいち早く CSR(企業の社会的責任)活動に取り組み、ついには人事部を CSR 部に吸収する思い切った改革に取り組みられました。さらにエコロジーとエコノミーの両立を求めて全事業所で自然保護活動を推進し、環境貢献製品が全売上高に占める割合を 2009 年度の 21%から 2013 年度には 40%に上げるのが目標だそう。最近お目にかかったら、「最初にいったのが黄土高原だったから、ほんとになつかしい。ぜひまた行きたい」。高速道路の全面開通で、あの大渋滞はなくなりましたよ。実現を楽しみにしています。

(昭和 41 年入寮 高見 邦雄 NPO 法人「緑の地球ネットワーク」事務局長 記)

日時：平成 23 年 5 月 25 日(水) 18 時 30 分～21 時

場所：学士会館本館 203 号室(千代田区神田錦町 3-28 Tel 03-3292-5931)

会費：5000 円(会場費、夕食代・ビール代、通信費など込み、別途二次会あり)

定員：70 名(先着順：定員を超えない限り特に連絡は致しません)

申込先：平賀・干場 Fax 03-5689-8192 電話 03-5689-8182

(有)ティエフネットワーク Email: tfn-hoshiba@blue.ocn.ne.jp

◎終わりに

この時に当たり、40 年前に繰り返し心に刻んだ「一人は万人のために！万人は一人のために！」、「力ある者は力を！知恵ある者は知恵を！」という全共闘のスローガンをあらためて思い出す。それぞれの持ち場で、それぞれが出来ることを！皆のために！再見！